

芹沢文学読書会

案内通信

No. 156

2022年6月22日(水)

(令和4年)

6月便り

新型コロナウイルスは、まだ続いています、共存の発想から外国からの観光客を受け入れつつあります。各国ではマスクも止めていますが、日本では買物や食事ではマスクをしています。重症者や死者が激減していますが、感染した人々の後遺症が長く続き、回復が大変のようです。ワクチンを3回していても感染するようですから、御自愛下さい。

ロシアの独裁者プーチンのウクライナ侵略が4ヶ月も続いています。ウクライナが反撃していますが、ロシア軍による爆撃でビルや民家が破壊され、多くの人々が犠牲になっています。21世紀に、こんなことは許されません。追詰められても、核兵器が使われることがあってはなりません。人類が滅亡することになります！何と愚かなことか……。

芹沢文学読書会を続けたいと思います。今回は、参議院選挙が7日に行われるので、第3日曜日の7月17日に変更して行います。体調の良い方は、大分県立図書館へお出掛け下さい。芹沢文学読書会は、随想集『文学者の運命』の随想を二つずつ読み語っています。どうぞ、マスクをして気楽にお出掛け下さい。御無沙汰の方も奮って御参加下さい。

松林庵主人
悲^ひ惨^{さん}なり…
プーチンの
ウクライナ^{せん}戦

第156回・芹沢文学読書会

①日時; **7月17日(日)** 午前10時~12時 [*今回は第3日曜日午前です]

②会場; **大分県立図書館 研修室 No.1** [*今回は特別に研修室No.1です] 📍 ➡ 🌟 ☆

③内容; **[I] 芹沢文学に関する話題や情報** 10:00~10:10 am 自由に話す。

[II] 芹沢文学読書会 10:10~11:40 11:45~12:00 am 輪読 🎵 🎶 🎷

○テキスト 随想①「**外国語で小説が書けるか**」随想②「**それでも母国語で書くべきではなからうか**」 *随想①は結核闘病中に、フーベル夫人や作家Kに出会い、フランス語で書き始めたこと。随想②はフランス語で小説を書いた田中君のことを書き、母国語の日本語で創作することを勧めたこと。

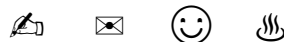
初出/『ノーベル賞文学全集』(主婦の友社発行)の月報。①昭和46年6月、月報9 ②昭和46年7月、月報10
初刊本/『文学者の運命』昭和48(1973)年6月10日 主婦の友社発行。69~83頁。

再録/『芹沢光治良文学館12』平成9(1997)年8月10日 新潮社発行に収録。45~52頁。

＝次回は、9月11日(第2日曜日)午前の予定です。＝

◎同封資料 随筆『**パリの学生達の生活**』「**パリの主婦たち**」**芹沢光治良** 雑誌<それいゆ> ひまわり社 昭和27(1952)年3月1日発行。19~20頁。*前回の続きの随筆です。パリの家庭の主婦は、衣服の流行を追わず、子供の育成に尽力し、大学受験では一緒に勉強をすとか…。 [資料提供/中村輝子]

芹沢文学・大分友の会



連絡先: 〒872-1651 大分県国東市国東町浜 4765(番地) 小串信正方

☎ FAX 0978(77)0565 郵便振替口座 01970-5-16072/芹沢文学・大分友の会

☆ 第155回・芹沢文学読書会の報告 於 大分県立図書館・研修室No.5 』♪♪♪

第155回の芹沢文学読書会が、5月15日(日)に大分県立図書館の研修室No.5で行われました。新型コロナウイルスは、日本でもオミクロン株の変異があれこれと生まれ、第6波の流行が中々収束しません。マスクをして読書会は継続しています。今回は、福津の田中さんが参加してくれました。熱心な会員で、芹沢文学読書会は活発に行われました。

芹沢光治良記念文化財団や沼津芹沢文学愛好会のこと、芹沢光治良文学愛好会や芹沢文学愛読者の会のことも近況を報告しました。コロナ禍の中で、継続されています。

今回のテキストは『文学者の運命』の二随想「ポール・ヴァレリーも私の恩人であった」「書くことは生きることです」でした。『芹沢光治良文学館12』(平成9年8月10日新潮社発行)の36~44頁を輪読しました。「ポール・ヴァレリーも私の恩人であった」には、フランスのパリに留学した芹沢光治良先生は、同じ家に同居していたアカデミー会員のベルソール先生に連れられて、あるサロンで大詩人のポール・ヴァレリーに会ったことを回想します。「書くことは生きることです」では、一高、東大、留学の頃を回想し、結核闘病で「私にもまだ一つの可能性の芽がのこっていた」ことを自覚しました。「書くことが生きることだ」と文学をすることを決意したと回想しています。社会科学者としての道を断念して、文学者(作家)の道を決意したのです。もしも、闘病して完治せず、日本に帰国出来ない時には、フランス語で書こうとも思ったりもしたのです。「国際サナトリウムでは、書くことを励まし、協力してくれた多くの戦友にめぐまれた」と書いています。

次回も『文学者の運命』の随想二作を読んで行きたいと思います。御参加下さい。

【芹沢文学案内 No.101】『サロン・マグノリア—岡玲子文集—』 ♡◇♣♠

昨年の11月21日に「岡玲子様 偲ぶ会」が行われました。岡寿里様も帰国され、サロン・マグノリアで挨拶・朗読・映像・思い出の言葉・財団について(勝呂奏)・お礼の言葉(岡寿里)がありました。この時に記念品として『サロン・マグノリア—岡玲子文集—』が贈られました。内容(目次)は、岡玲子略伝、母をなつかしみつつ、父の「うしろすがた」、黒革のカバン、父の思いで、父 芹沢光治良とフランス、サロン・マグノリア、希望を遺して逝った父、父の肖像、お文さんも天国へ、父の生誕百二十年に寄せて、皆様「ありがとうございます」、家族が助け合った疎開生活、岡玲子著作目録(稿)、〈サロン・マグノリア—岡玲子文集〉勝呂奏です。この記念文集を読むことにより、故岡玲子様を深く偲ぶことが出来ます。

『サロン・マグノリア』

この6月4日(土)14:00~16:00に「岡玲子様 一周忌記念朗読会 “風に鳴る碑” から“海に鳴る碑” へ—彫刻家・向井良吉との交流にふれて—」がサロン・マグノリアで行われました。我入道海岸にある文学碑「風に鳴る碑」の建立者である彫刻家向井良吉様と芹沢光治良先生の書簡の紹介、文学碑“風に鳴る碑”から小説“海に鳴る碑”への変遷に関する勝呂奏先生(財団代表理事)の講演、山中一徳氏の朗読が行われました。登録者30名が参加しました。九州の大分からは参加出来ませんでした。遠く一周忌を祈念いたしました。㊦

芹沢文学読書会

案内通信

No. 155

2022年4月18日(月)

(令和4年)

4月便り

新型コロナウイルスは、第6波が終わらずに第七波が始まりそうです。オミクロン株がBA.2となり、EXに変異しているとか。まだまだ流行が終わりません。3回目のワクチン接種が遅れています。大型連休の前に、少しでも収束させたいものです。御自愛下さい。

コロナ禍ですが、3月24日からロシアのプーチンが、小国のウクライナに侵略して、都市を破壊し、軍隊でない女性や子供までも残虐に殺害しています。ソ連が崩壊して、KGBの一員だったプーチンが大統領となり、独裁者として22年間も圧政を続けていましたが、2014年にクリミア半島を進攻し、そしていよいよウクライナを侵略しようとしています。21世紀に、このような侵略を許してはならないし、生物化学兵器や核兵器は使わせてはならないのです。ロシア人からの戦争反対の声も起りつつあります。今後の戦争の犠牲者が増えることを悲嘆しています。プーチン政権は、この侵略で崩壊するでしょう…。

芹沢文学読書会を続けたいと思います。体調の良い方は、県立図書館へお出掛け下さい。芹沢文学読書会は、随想集『文学者の運命』の随想を二つずつ読み語っています。どうぞ、読書会へ気楽にお出掛け下さい。御無沙汰の方も奮って御参加下さい。

新緑の
柿の若葉に
初夏の風…
松林庵主人

第155回・芹沢文学読書会

①日時: **5月15日(日)** 午前10時~12時 [*今回は第3日曜日午前です]

②会場: **大分県立図書館 研修室 No.5** [*会場/平常は研修室No.5です]

③内容: **[I] 芹沢文学に関する話題や情報** 10:00~10:10 am 自由に話す。

[II] 芹沢文学読書会 10:10~11:40 11:45~12:00 am 輪読

○テキスト 随想①「**ポール・ヴァレリーも私の恩人であった**」随想②「**書くことは生きること**です」 *随想集『文学者の運命』の二作品ずつを読み語る。30年前の留学の回想。

初出/『ノーベル賞文学全集』(主婦の友社発行)の月報。①昭和46年4月、②昭和46年5月初刊本/『文学者の運命』昭和48年6月10日 主婦の友社発行。53~68頁。

再録/『芹沢光治良文学館12』(平成9年8月10日 新潮社発行)に収録。36~44頁。

＝次回は、参院選挙のために、7月17日(第3日曜日)午前の予定です。＝

◎同封資料 随筆『**パリの学生達の生活**』「**試験地獄と長い夏休み**」**芹沢光治良** 雑誌<それいゆ> ひまわり社 昭和27(1952)年3月1日発行。18~19頁。*前回の「国立音楽学校」の続きの随筆です。ソルボンヌ大学でのバカロレア試験で集っていた学生から、自分の留学を回想します。 [資料提供/中村輝子]

芹沢文学・大分友の会



連絡先: 〒872-1651 大分県国東市国東町浜 4765(番地) 小串信正方

☎ FAX 0978(77)0565 郵便振替口座 01970-5-16072/芹沢文学・大分友の会

☆ 第154回・芹沢文学読書会の報告 於 大分県立図書館・研修室No.4 ♪♪♪♪

3月13日(日)に第154回の芹沢文学読書会が、大分県立図書館の研修室No.4で行われました。新型コロナウイルスは、日本でも変異のオミクロン株で第6波の流行が続いていますが、読書会は継続しています。会場は研修室No.4となりました。今回も、小倉の金さんと中津の呉さんは、電話があり欠席しました。参加者は少なかったのですが、芹沢文学読書会は熱心に行われました。テキストは『文学者の運命』の二随想「不幸であるから小説を書くのか」「私の胸の奥には」でした。『芹沢光治良文学館12』(平成9年8月10日新潮社発行)の28～36頁を輪読しました。「不幸であるから小説を書くのか」には、芹沢光治良先生は、両親が新しい天理教信仰で財産を処分して家を出て行ったので、捨てられたと思い、不幸で苦学したことが書かれています。このような不幸が、小説家にしたとも言えると回想しています。人の援助で沼津中学に進学し、一高で学び校友会雑誌に処女作を発表します。「私の胸の奥には」には、東大では経済学部に進学し、ペールと親しんだ石丸氏の家に下宿し、ロランやシェークスピアの原書をもらいます。しかし、愛する女性の親に認めてもらうこともあり、高等文官試験を受験して官吏になりました。しかし、失恋して官吏を辞めてパリに留学したことなどが書かれていました。

次回も『文学者の運命』の随想二作を読んで行きたいと思います。御参加下さい。

【芹沢文学案内 No.100】 短編小説集(コバルト新書)『芸者』 ♡◇♣♠

芹沢文学では、短編小説集も多く出版されています。昭和31年1月25日に鱒書房からコバルト新書として短篇小説集『芸者』が発行されました。表紙の折返しに「名作『巴里に死す』の仏訳で、一躍フランス読書界にまで文名をうたわれた筆者が、戦後書きおろした傑作中の傑作九[八?]編! いずれも幽遠、繊細、珠玉の名品!」と宣伝されています。作品としては、芸者、母の心配、としごろ、嫁ぐむすめ、花と神様、愛の幻想、紅葉、老いらくが収録され、「あとがき(1955年12月30日)」短編小説集『芸者』が223頁に添えられています。それには、「ここに集めた小説は、戦後十年間に書いた短篇である。」「私はその十年間に、五十篇以上の短篇小説を書いている。／このたくさんの短篇小説は、作品としてよしあしは別としても、作者である私にとっては、なつかしいものばかりである。苦悩の多かった時代に書くというのは、小説であっても、魂の日誌のようなものがにじんんでいるからだ。／従って、五十篇以上の作品から、十篇足らずの作品を選ぶのは、困難であった。」と書いています。

この八編の短編小説で、芹沢文学研究会の同封資料として提供したのは、「芸者」と「としごろ」の二編です。「芸者」について、この「あとがき」に、「芸者というような題で、小説を書いたのも、その一年前の「ゲーシャガール」と題した短篇小説とともに、私の長い文学者生活に珍しいことだ。」と書いています。終戦後には、筆一本で稼がねばならなくて、求められるままに、多くの作品を書きました。しかし、売文的な作品は書いてはいません。単行本に収録されなかったものは多くあります。⑩